

つくたまま

都市づくりNPOさいたまは…
市民のまちづくりへの参加を支援し
まちづくりの新たな価値を提案し
具体的まちづくり活動を実践して
市民がまちづくりの中心にある社会を目指します。

vol.09
March.2019

【編集後記】

この特集は、2回に分けて構成される。今号は、歴史的な流れを追い、大宮駅東口の公共施設再編による連鎖型まちづくりが中心になった。連鎖型まちづくりは、公共施設総量規制の中にあっても、大きな税金投入に対する批判もある。次号では、こうした公共施設を魅力あるものにするための市民の関わりと、市民の資産や事業をまちへ開く取組みを中心に紹介したい。

制作に当たっては、UDCOの方々との議論を重ねながら進めている。UDCOは大宮駅周辺地域の都市再生に関わる都市再生推進法人であり、当該地域で調査研究、社会実験、OMテラスの施設管理など様々な取り組みをしている。その活動について、詳しくは次号で取り上げる。

【編集担当】若林祥文、三浦匡史、古里実、福田雄亮 【編集協力】UDCO

都市づくりNPOさいたま情報紙		vol.09 March.2019
1	2	3
4	5	6
特集 大宮駅東口のまちづくり		
前編 まちづくり再編の胎動		

表紙写真解説 ①2019年5月に竣工予定の大宮区役所新庁舎。シルクを想起させる外装デザインは、かつてこの地域に製糸工場が集積していた歴史と記憶を引き継ぐ大切なモチーフとなっている。②武蔵国一宮氷川神社。二の鳥居。この先にある大宮図書館は区役所新庁舎へ移転予定。③大宮駅東口から中央通りを見る。駅前に降り立ち歩く人の視線からは奥に控える緑豊かな氷川参道の気配は感じ取れない。④アートフルゆめまつりの様子。ハード面でのまちづくりは目に見えて進まない状況でも、まちを使って地域の人たちが出会い、交流するシーンは着実に増えてきた。⑤路地は東口ならではの風景。人との距離が近い、この「限界性」は防災面の不安にも苛まれるが、これもまた貴重な東口の「らしさ」であろう。⑥大門町2丁目中地区市街地再開発事業計画地(2021年10月竣工予定)。駅前再開発のリーディング事業としての役割が期待される。(写真②④提供:UDCO)

インフォメーション



3/29~31 芸術祭サポーター活動報告会

市民活動サポートセンター・多目的展示コーナーで開催。さいたまトリエンナーレ2016を契機に始まった芸術祭サポーター活動は、トリエンナーレ終了後も途切れることなく自主的に活動を続けている人たちがいる。2020年3月14日から5月17日まで開催されるさいたま国際芸術祭2020に向けて活動を続けるサポーター達の活動の様子を、パネル展示やトークイベント、ワークショップなどで伝える。

5/12 アートフルゆめまつり2019



大宮駅東口を中心とするまちなか12会場で開催。音楽演奏やダンスパフォーマンス、ワークショップや作品展示などによって賑やかな1日を創出する。2008年からスタートして今年で12回目。公共施設再編など街づくりの動きが見え始めた大宮駅東口地区で、まちの賑わいを創出する市民手作りのイベントとして定着している。

募集 都市づくりNPOさいたまは
正会員、賛助会員を募集しています。

- 正会員(年会費10,000円)：当会の趣旨に従って事業に主体的に参画していただける個人の方で、法律上NPO法人の「社員」となります。年度一回の総会に出席して議決権を有します。
- 賛助会員(年会費3,000円/口・年度を1口以上)：当会の趣旨に賛同し、資金的な支援をいただける個人または法人の方。法律上NPO法人の「社員」ではありませんが、当会から情報提供を受けられます。

募集 都市づくりNPOさいたま情報紙「つくたまま」の発行に
協賛を募集しています。

協賛金10,000円でこの欄に協賛いただいた方の記事(広告やイベント告知等)を掲載いたします。

各お申し込み・お問い合わせは下記「都市づくりNPOさいたま」まで

つくたままとは？ | つくたままは、都市づくりNPOさいたまの愛称です。つくたままは、市民のまちづくりへの参加を支援し、まちづくりの新たな価値の提案や、具体的まちづくり活動を実践して、市民がまちづくりの中心にある社会を目指す特定非営利活動法人です。

つくたままの主な活動

- 調査及び研究事業
見沼田んぼ景観形成ビジョン研究会/埼玉県景観整備機構活動(景観DBの活用を含む)/高沼用水の整備に関する検討/つくたまま塾の開催/さいたま百景普及活動/上尾市画整理公園実施設計業務/上尾市大谷第四地区画整理町界・町名変更検討業務/東大宮商店街地域つながり力アップ支援事業/増大通り商店街地域つながり力アップ支援事業/5つのワーキンググループ活動
- 情報発信事業
Webサイト、FBの運用/つくたまま情報紙の発行
- 普及・人材育成事業
研修旅行/講師派遣
- コーディネート、ファシリテート事業
氷川の杜まちづくり協議会/JR環境空間「河童の森づくり」に関する支援/「河童ぶち公園整備」に関する市民参加のコーディネート/さいたま・まちプラン市民会議2015~2016/区民会議活動支援業務/アートフルゆめまつり事務局支援/岩槻・丹過長谷川蔵保全活用計画/さいたま市総合型地域スポーツクラブのあり方検討調査業務
- 市民活動支援事業
市内各地区の地区計画検討支援/芸術文化を活かした地域活性化事業~美術と街巡り・浦和
- その他の事業
さいたま市福祉のまちづくり推進協議会/埼玉県景観審議会/つくたままアクションプランの検討/埼玉県景観アドバイザーとしての取組

●編集・発行/2019年3月(通算第9号) ●デザイン・編集協力/藤巻 武士、松尾 英香

特定非営利活動法人
都市づくりNPOさいたま

〒336-0917 埼玉県さいたま市緑区芝原2-16-21 (地域生活デザイン内)
tel & fax : 048-876-1782 e-mail : jimu@tsukutama.info
http://www.tsukutama.info



特集 大宮駅東口のまちづくり

前編 まちづくり再編の胎動



特集

大宮駅東口のまちづくり

近年ようやく、まちづくり再編の胎動が感じられるようになってきた大宮駅東口。都市計画決定の廃止という、全国でも極めて珍しい歴史を持つ、この地域のまちづくりはどんな変遷を経て、これからどんな未来へと向かおうとしているのか。

最近、大宮駅周辺地域の動きを注目している。特に、東口地域での都市更新の動きが目立ってきた。このテーマをこれから2回に分けて、追ってみたい。この号では、東口周辺地域の動きの端緒を探り、現在の動きに至る過程を辿る。

行政(官)のまちづくりの流れ

大宮駅東口周辺地域のまちづくりには、いく筋かの流れがあるようだ。1つ目は行政(官)が担う大きなまちづくりの流れだ。大宮駅を中心とした区域で旧大宮市は主要駅に相応しい顔

づくりをしたいという意欲のもとに、都市整備事業に取り組んだ。西口はかつて大宮が国鉄の街と言われた風景を駅前に形成していたが、鉄道から国道17号線までの地区を複数の工区に分け、土地区画整理事業で進められる区域を先行して事業化した。郊外型の土地区画整理事業とは異なり、密集市街地での事業には相当な根気と知恵が絞られた。

そして旧市は、大宮駅東西区域の均衡ある発展と東口の駅前整備に向けて1982年に「大宮市中心市街地整備構想」・

「大宮駅東口再開発構想案」を発表した。国道16号線・17号線、南大通り線及び氷川参道に囲まれた約110ヘクタールの区域である。東口駅前を発展する大宮に相応しい顔づくりと戦後処理対策を含む氷川参道の整備に着手したが、顔づくりの東口再開発構想は住民の反発が強く、大きく躓いてしまった。東口地域で都市整備が本格化していくのは、氷川参道事業からだろう。市街地に目立つ大宮公園・氷川神社の大きな緑と、参道の緑の軸線を活かす都市整備は現在も新たな課題と向き合いながら進められている。

こうして顔づくりの流れは一旦、よどんだように見えたが、伏流水は流れていた。旧市はまちづくりにおける住民との役割を見直した。さいたま市になり自治体の体制を整えながら、再び大きな流れを作ってきたが、今後、さらに豊かな流れになるのかを注視し続けたい。

住民たちが創り出す流れと大学等(学)が生み出す多彩な流れ

2つ目の大きな流れは住民たちである。大宮人の特徴とも言えるのかもしれないが、決してひとつにまとまるのではなくそれぞれが時には渦を巻いたり、時には波静かなように見えたりして、外部から流れ込んでくる水流も柔軟に受け入れた。住民たちは積極的に意見を述べて、また、出来ることを実行して元気な流れをつくってきた。次ページ以降ではインタビューからさらに掘り下げてみたい。

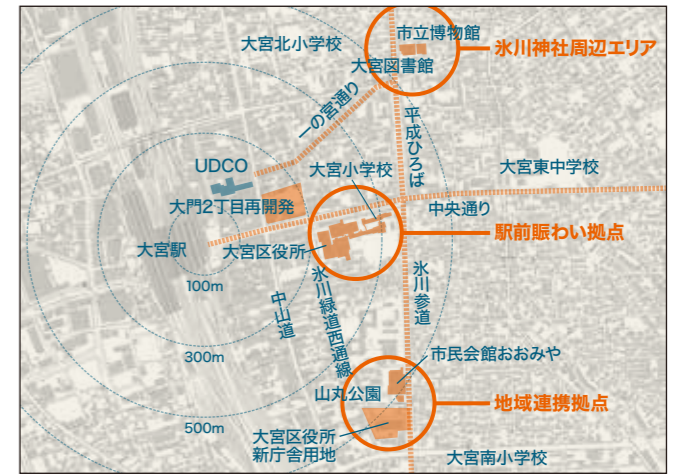
3つ目の流れは大学や学識経験者たちの新鮮な流れだろ

う。新鮮な活力を加えながらも、時には表面に飛び出してくるような生き生きした流れだ。大学生たちが街のあり方についていろいろな意見を出して、行政マンや住民たちと意見交換をするという親密な流れだ。

そうした複数の流れを引き受けた活動がアーバンデザインセンター大宮UDCOの設立にもつながった。全国で先導的な都市環境整備に取り組んでいるところではこうした組織が設立されて、多彩な活動をしている。ちなみに浦和美園地区には別の組織ができ、大宮に先行してアーバンデザインセンターみそのUDCMiが活動している。

さて、複数の3つの流れがそれぞれの独自性を活かしながら、どのような混ぜ合わせをしていくのか。【文責：若林祥文】

公共施設再編が大宮駅東口まちづくり機運の先導役となっている



参考提供:UDCO

和 暦	西 暦	大宮駅東口まちづくりの潮流	出来事	官	民	学
昭和57	1982		6月 新幹線、大宮駅開業	「大宮市中心市街地整備構想」・「大宮駅東口再開発構想案」を発表。整備が進んでいる大線、南大通り線及び氷川参道に囲まれた約110ha。東口再開発については1978、1980年大宮駅東口再開発事業、都市計画決定	宮駅西口とこれから整備を進めたい東口をカバーする。整備対象区域は国道16号線・国道17号に構想案を発表していた	
58	1983	■対立・停滞期		9月 「大宮都心構想」発表、大宮駅周辺地区とさいたま新都心地区をカバーする約450ha	東口再開発区域住民らの強い反発が起こる	
平成3	1991	新幹線開業の流れに乗った西口に対し、行政の思惑と住民の意思が折り合わない東口。都決されるも住民の反発が強く前進出来ず				
7	1995		5月 さいたま新都心 まち開き			氷川の杜まちづくり協議会発足
12	2000		11月 Suica 利用開始	5月 さいたま市誕生		
13	2001			12月 国による公共事業の再評価に則り、市は東口再開発事業の中止を決定と同時に大宮駅東口都市再生プランを発表		
14	2002	■転換期		4月 東口再開発事業の都市計画決定廃止、駅前広場は都市計画決定		
16	2004	都市計画決定は中止～廃止へ。行政にとっては大きな挫折を味わったが、これを機に住民との対話の姿勢が生まれていく	9月 コクーン新都心開業			
17	2005		3月 エキュート大宮開業			芝浦工業大学生らが銀座通りで、イルミネーションプロジェクトを開催
18	2006					
19	2007		10月 鉄道博物館開館		大宮駅東口協議会(OEC)の活動が自然発生的にできる	
20	2008			6月 戦略ビジョン策定委員会、始まる(～2014年3月まで、計9回開催される)	3月 第1回、アートフルゆめまつり開催。ほぼ毎年開催。150団体参加 10月 大宮東口協議会OECが法人化	
21	2009	■萌芽期			銀座通りのアーケード撤去、歩道再整備始まる	
22	2010	行政との対話を通じ、地元住民も自らのまちを自主的に考え始める。OECの発足が呼び水となり団体が増え、住民ネットワークが少しずつ重層的になっていく		5月 大宮駅周辺地域戦略ビジョン、まとまる。公共施設再編連鎖型まちづくりを公表(大宮区役所、市民会館おおみや、埼玉県大宮 合同庁舎を含む区域を対象)	4月 さいたま市長がNHKさいたま支局を大門2丁目中地区の再開発に移転要請 5月 東口でのまちづくり協議会活動は13団体がつくれた	11月 さいたま市誕生10周年記念学生提案競技(～2011/7 都市計画学会との共催。東口区域を対象にしたまちづくり提案競技)
23	2011					
24	2012	この頃から学生や学識者・専門家が、まちづくりの一員に参加し始めた事が「官」と「民」を結び付ける重要な役割を果たすターニングポイントとなった		6月 市は全庁的な公共施設再編のマネジメント計画を公表		10月 東洋大学+東京芸術大学による大宮東口プロジェクトが始まる
25	2013			8月 一の宮通りのWS始まる(2013年度まで5回WSが開催された)		7月 東洋大学が「公共建築から考えるアーバンデザインの実験大宮東口プロジェクト2014」を発表
26	2014		3月 北陸新幹線延伸開業	6月 市が戦略ビジョン委員会でUDCOの設立を報告		
27	2015			5月 大宮区役所新庁舎基本計画を発表	2月 NHK支局は大門2丁目中地区再開発への移転を辞退 3月 大宮駅東口大門2丁目中地区再開発組合、設立認可	
28	2016	■行動期		5月 大宮区新庁舎のPFI事業者決定(大成建設+シーラカンス他の事業者) 8月 大宮駅グランドセントラルステーション化構想委員会始まる		
29	2017	住民との対話手段を見出し始めた行政は公共施設再編の具体的な施策を実施段階に移し始める	7月 大門町2丁目中地区再開発事業着工	7月 大宮駅東口周辺公共施設再編・公共施設跡地活用全体方針(原案)を発表 8月 大宮駅周辺地域が都市再生緊急整備地域に指定 7月 大宮駅グランドセントラルステーション構想化(GCS)発表	7月 大門町2丁目中地区再開発事業着工(市民会館の機能を入れる)	4月 OM TERRACEの利用開始
30	2018					
29	2017	高まる機運を更に前進させるため、UDCOが活動を開始。地域の様々なプレイヤーが有機的に混ざり合う新たな連携が形になる		UDCOの動きにより、産官学民の連携が形になった		
30	2018			3月 UDCO設置・活動開始/ 4月 OMテラス竣工・供用開始/ 9月 おおみやストリートテラス実施/ 10月 UDCO、都市再生推進法人に指定/ 2月 UDCOが「市民・専門家参加に基づいた提案書」を提出(公共施設再編全体方針に対する意見書、4つのPI)		
31	2019			5月(予定)大宮区役所新庁舎・図書館完成。氷川線西通線一部(南側)開通		

中野 英明氏 インタビュー ▶ 大宮駅東口地域の歩みを振り返る。

大宮駅周辺地域の都市づくりに向けて、市役所の取り組みはどうだったのか。旧大宮市時代から都市づくりを担当されてきた中野英明氏（元市都市局長）にお聞きした。



中野 英明氏

「昭和57年の新幹線の大宮駅、開業が大きなエポックとお聞きしていますが、具体的にお話しください。」

停滞していた大宮駅西口駅前前の土地区画整理事業は新幹線の開業を契機に大きく動き出しました。西口の整備が進むな

かで、大宮駅東口は街並みも古く交通問題など多くの課題を抱えていました。東口駅前を市施行による市街地再開発事業で整備しようとしたが、地元と対立することとなり長年の懸案事項となっていました。

東口地域でまず取り組んだのは、氷川神社の参道整備です。氷川参道には当時、戦後の闇市が駅前から移転してそのままとなってしまった区間があったり、参道に集中する自動車交通が大きな問題でした。「暗い・汚い・危険」な参道をなんとかしようと手探りで住民参加型のまちづくり手法を試みました。こうしてさいたま新都心から参道を経て大宮公園までの緑の連続性を意識し、さいたま新都心と氷川参道をつなぐほこすぎ橋の建設にあたってはJRの協力を得ながら鉄道上空での緑化を実現できました。

参道整備で行った平成ひろばは氷川神社の土地で実施するため、政教分離等に慎重に対応した結果、市が30年間の地上権を設定して事業を実施しました。数年前にその30年が経過した後は2年ごとの更新としました。神社や沿道の民有地との関係は引き続き課題になっています。

「大宮駅東口再開発事業は都市計画の廃止という、言わば挫折から始まったと思えるのですが、どういう状態だったのでしょうか。」

東口駅前の再開発事業は長年地元との対立が続いていたことから、公共事業評価監視委員会による再評価を受け、市は再開発事業を白紙にして新たに駅を中心とした区域を対象に都市再生プランに着手しました。その中で、行政は道路等の公共施設の整備を行い、民間の所有地は民間でまちづくりを考えるよう役割分担を投げかけたところ、13のまちづくり団体ができ、市も団体の活動を積極的に支援して

きました。その後、都市再生プランを吸収して「大宮駅周辺地域戦略ビジョン」に発展することになりますが、公開した策定委員会には多くの住民が参加してくれて、委員会と部会を分けて3年間にわたり議論を積み重ねました。

「大宮駅周辺地域戦略ビジョンでは『公共施設再編による連鎖型まちづくり』とはどういう内容でしょうか。」

この内容は、区域内に点在する老朽化した公共施設を再編し、あわせて周辺区域を取り込むまちづくりを展開する方針を提案しました。その後に全市的に策定された「公共施設マネジメント計画」の具体的な取組みを先行して位置づけた形となっています。

この戦略ビジョンの策定を契機に、大学など様々な学識経験者との接点も生まれました。丁度タイミングが良く、日本都市計画学会60周年事業の一環として、大宮駅東口区域を対象に学生によるまちづくりのアイデアコンペが開催できました。このイベントでは地域住民たちも積極的に関わるなど、「対話型」のまちづくりへと発展していきました。

「最近、大宮駅グランドセントラルステーション化構想(GCS)が公表されましたが、大宮駅及び東口の今後のあり方についてはどうでしょうか。」

現在進めているGCS構想では、大宮駅を中心に東日本の対流拠点となるよう、乗り換え利便性を含めた大宮駅の高度化、交通基盤整備、周辺街区のまちづくりを三位一体で実現していく方向性を打ち出しています。本構想の中で、大宮駅北側に東西をまたぐ動線の提案ができました。これからのまちづくりにおいて、JR側と都市側の敷地を分けて考えるのではなく、お互いに境界を越えて考えていくことが重要だと思っ、話し合いを重ねてきましたし、今後も更に進めていきます。

戦略ビジョン策定以来、今後のまちづくりを展開する上で、新たな公民連携の組織の在り方を探っていました。都市再生推進法人UDCOの設立が実現したところですが、UDCOにはエリアマネジメントの視点からも幅広い活動を期待しています。

行政マンに対しては、担当している取組みのすべてのことは市民のためになるという強いハートを持って、義務感と信念を持ってほしいと思っています。



氷川参道を望みながら線路をまたぐほこすぎ橋を見る。橋の上の緑化に力を入れた。

※注「大宮駅周辺地域戦略ビジョン」についてはさいたま市役所HPで検索でき、ビジョンの内容、検討過程などが詳細に閲覧できる。「大宮駅グランドセントラルステーション化構想」も検索でき、市民参画の情報も得ることが出来る。

大宮駅東口地域における氷川参道

氷川参道の歴史 武蔵一宮氷川神社の参道だが、江戸期以前は中山道の一部だった。1628年(寛永5)の往還替えによって中山道大宮宿が整備され、街道から分かれて神社に向かう参道となった。



江戸名所図会の一の鳥居の図

今はケヤキが中心の並木道だが、元々は鬱蒼とした杉並木だった。第二次大戦中に燃料等のために伐採されたと言われている。一の鳥居から神社まで十八丁、約2km。



杉が鬱蒼と茂る戦前の氷川参道

氷川参道の位置 大宮駅から約550mの位置にある。都市計画の用途地域では、参道西側の大部分は「商業地域」、東側は中央通り周辺の他は主として住居系用途地域であり、大宮駅・さいたま新都心駅周辺の商業業務地区と住宅地の境に位置している。



大宮駅東口地区における氷川参道の位置

また、さいたま新都心地区と大宮駅東口周辺地区および氷川神社・大宮公園地区を結ぶ回遊路の役割を持つ。

氷川参道の現状 一の鳥居から中央通りまでの南側区間については、参道の中央部6mが市道となっている。北向きの一方通行ではあるが通過交通が多く、狭い幅員の中で歩行者、自転車、自動車が錯綜して危険な状態にある。

市街化によって樹木の生育するための十分な空間がなくなり、参道並木の大半が不健康な状態にある。日照、通風が妨げられているとともに、沿道建物との関係による過度な枝の剪定等から腐朽菌に侵されている樹木が多い。

また、幅35mで風致地区が指定されているが、特に西側に高層のマンションが林立していることも含めて、参道にふさわしい街並みになっているとは言えない。

氷川の杜まちづくり協議会の活動

協議会活動の経緯 「氷川の杜まちづくり協議会」は1995年、旧大宮市の働き掛けにより、中央通り南側参道周辺の10自治会や住民が中心となって発足した。神社と行政の間で、参道に関する問題に取り組もうとするものだ。

協議会の事務局は、当初から大宮市（現在はさいたま市）の「氷川参道対策室」が担っている。

なおこの協議会の活動対象エリアは、主として一の鳥居から中央通りまでの参道南側区間である。

協議会活動年表（主としてさいたま市誕生以降について）

年	内容
1995年	協議会発足
2001年	さいたま市誕生、シンポジウム「氷川参道の将来像を考える」開催
2002年	参道並木の樹木調査開始(2009年全区間完了)
2003年	パンフレット「氷川参道のまちづくり」発行
2004年	氷川参道将来像ワークショップ開催(4日間)
2005年	パンフレット「氷川参道の樹木調査」発行
2006年	一の鳥居ひろばデザインワークショップ開催(3日間)
2010年	並木敷きへの低木植栽・竹垣設置事業開始
2014年	街並み形成先進地視察、街並み講演会開催
2017年	並木敷きの修景に関するワークショップ開催

協議会活動の成果 20年以上にわたる協議会活動の主な成果は以下のとおりである。

- 行政による「氷川参道交通計画検討協議会」「同・歩行者専用化検討協議会」に協力して、参道南側区間の一方通行化・歩車分離工事と歩行者専用化を促進
- 参道全区間における高木700本の樹木調査を実施。その結果に基づき、並木敷きへの立入り抑制と修景のための低木植栽と竹垣設置を実施（継続中）
- 歩行者専用化された参道の使い方、将来イメージを提案。ただし、沿道を含めた街並みの具体的な検討は未着手
- 参道の樹木やまちづくりに関するパンフレットの発行、樹木観察会、区民フェア等での市民へのPR



歩専用化された参道の将来イメージ

当初参道南側区間の地区をベースに立ち上げられたが、参道がさいたま市民全体の資産であることから、芝浦工業大学とも連携、市全域から市民が参加する組織へと発展してきた。しかし近年、活動の内容や会員の構成、運営が内向きになっているように見える。

今後の氷川参道整備の課題

大宮区役所が参道脇に移転し、一部区間の歩行者専用化も実現するに当たり、東口まちづくりの重要な部分として整備していかなければならない。参道を一種の聖域として別扱いするのではなく、他地区との連携のもとに取り組んでいくことが必要である。

また、参道内の緑や交通問題だけでなく、沿道の土地利用誘導や街並み形成を目指していくべきだ。例えば、風致地区の見直し、景観条例の活用等が望まれる。

そのためには、一の鳥居から神社まで約2kmの参道全体を対象にして、さいたま市全体からの市民、大学、中間支援組織等の参加が欠かせない。【文責：中津原努】

参考資料：「氷川参道のまちづくり」氷川の杜まちづくり協議会 2015年改訂版

久世氏、栗原氏 インタビュー ▶ **いろいろな対立を乗り越えて、大宮らしい街をつくる。**

東口のまちづくりに住民の方々はどのように取り組んできたのか。長年、地域で活動されている久世晴雅氏と栗原俊明氏にお話をお聞きした。久世さんの若々しい感性と栗原さんの自省的な語り口が明るく混ざり合っていた。

「お二人の東口のまちのエピソードをお聞きかせください。」

久世 大宮駅東口再開発の中止によっていったんまちづくりに向けてリセットできました。具体的には放置したままでよいのかという機運が市民の側から立ち上がってきて、青年会議所OBのメンバーが中心になった大宮駅東口協議会OECなどの動きが生まれました。また、東口周辺地域の権利関係者が主体的にまちづくりを考える必要性を訴えて、いくつもの組織が結成されていきました。

氷川参道の改造については沿道に住む立場として意見を出しました。埼玉大の久保田尚先生が加わって、歩車分離の検討の動きが民学官の連携のトライアルになりました。

栗原 当時は、大宮の東口に13の住民組織ができましたが、みんなが集まった「東口サミット」では怒号が飛び交ったりしました。その後は、住民それぞれの考えを尊重し、次第に話し合いの熟度が高まりつつある気がしています。

久世 東口の賑わいを取り戻そうという動機からアートフルゆめまつりを始めました。大宮の良さを知ってもらおうと、店先をお借りしたいと高島屋やロフトなど10数か所以上にお願ひした。当初は店先などの路上占用許可の相談をしに行ったが相手にされなかった。現在では地域内の小学校、お寺、街角など街中一杯の活動が定着しています。

「現在、そして、今後のまちづくりに思うことについて」

久世 住民主導の動きの新たな展開を模索して柏の葉アーバンデザインセンター UDCKを見学し、学との連携を考えるきっかけを得ました。まちづくり活動に学生の参加を得て、学生の意見、模型づくりなどを通じて住民が刺激を受けました。OECの勉強会の過程から工藤和美先生（東洋大学教授）に声をかけしたところ、藤村龍至先生（当時、東洋大学准教授）も一緒に大宮に来てくれました。そうした動きの中でゼネコン、デベロッパー、設計事務所などの人のつながりができてきました。そして、活動拠点であるまちラボ大宮が実現したのは、ビルオーナー企業の理解による。OECに対して場所を貸してくれて、それをUDCOにも継承させてもらっている。

栗原 大宮で商売する人の意識としては、明日のお財布の中身が心配であるし、一方で将来のまちづくりを考えてもいます。

大宮の街から老舗店舗が少なくなっているの、これからは意図してこれまでの街の良さを伝えるたり、魅力を作り出していかななくてはならない。大宮は東京に近いという立地であって、都心と同じものを目指してもだめだろう。ちょっと郊外に向かえばすぐに田んぼ、自然というのが大宮の良さだ。あるものを生かしていく、いい意味での田舎くさを大事にしたい。子育て世帯にとっても住みやすい街だろう。

久世 OECでは「ゴールドトライアングル構想」など13のまちづくり構想を立案しました。その後、東日本大震災が発生し、震度6以上で壊れるかもしれない建物がたくさんあることがわかり危機感が募りました。我々は民間の土地に口出しはできないが、行政施設や駅前などの公的土地の使い方、再開発のビジョンにはどんどん意見を出していきける。これからは駅周辺の機能をもっと高度化させたい。大宮は漫画発祥の地だ。漫画ミュージアムなどの文化拠点が考えられる。GCS構想で検討されている、駅コンコースから延びる人工地盤でアーケード下空間のような暗い空間をつくるのは反対です。GCS構想のズレ感は、トータルコーディネートしてくれる人材が不足しているからではないか。市役所には、駅広の改造を含めて国を取り込んでいく計画作りを要請している。トライアングルの構図も今後少しズレていくのではないかと（駅改造、新都心・新区役所）。その上での大宮駅東口周辺のまちのありようを柔軟に考えることも必要だと考えています。



久世さん（右）と栗原さん（左）……アートフルゆめまつり実行委員会にて

久世晴雅氏は若いときに青年会議所で社会開発の取り組みに積極的に関わり、全国のまちづくり現場を訪ね歩いた。氷川参道沿いでお店を営んでいたが、駅前地区での対立が厳しかった当時は地区の人たちからはよそ者扱いをされることもあったという。今回はアートフルゆめまつり実行委員会代表、大宮駅東口協議会会長の立場からお話をお聞きした。栗原俊明氏は、現在、大宮銀座商店街協同組合理事長であり、大宮の土地っ子だ。若いときに都内で働いていた。そして、地元の銀座通り商店街に関わり、突如、アーケード撤去事業を担当し、年輩の店主たちの声を個々に訪問して、しっかりと受け止めた。

作山 康先生 インタビュー ▶ **大宮駅東口地域の将来像を描くことは。**

作山康先生は、芝浦工業大学大宮キャンパスにある環境システム学科で「都市エリア」を担当されている。以前は、民間の都市プランナーとして全国で活躍しており、つくたまの会員でもある。今回は、多角的な視点で語っていただいた。



作山 康 芝浦工業大学教授

「大宮駅周辺地域の印象はどうでしたか。」

芝浦工業大学に赴任する前、大宮駅周辺地域がなぜ事業が動かなかったか不思議でした。都市開発事業などの成立条件もあり、都市整備に向けての事業等をやらなければならない必然性も、事業の計画性もあったが、なぜか動かない。他地区とも比較してみると、まちは生きもので、まちを変えていくことを望む人がいるかどうか大事だと思うのです。

この間の一連の動きは、市が計画策定に係るなかで住民への働きかけを継続して行ってきたことや、民間と行政を結びながら具体的な活動を先導するUDCOの誕生など、市が戦略をもって臨んできたことが大きい。

「都市づくりについての視点についてお聞きしたい。」

都市づくりにおいては、戦略が大事だ。政治とは区別される必要があります。市が行っている公共施設の老朽化などによる再編をまちの再編に結び付けていく取り組みは評価できます。区役所や市民会館などの跡地をどう進めていくのが今後の重要課題だと思います。特に、大宮小学校の扱い方は難しいでしょう。

GCS構想では、駅舎内での安全性や利便性を高めることとまちへの波及効果が両輪で進められていくことが必要です。駅からまちへ伸びていくデザインが大事です。複数の大学でこの区域を対象にまちづくり演習を実施、学生たちがいろいろな考えを示して議論ができました。特に、デッキを付ける場合は、回遊性の確保、まちへの伸び方や、規模や機能と費用対効果を十分考える必要があると思います。

学生たちのワークショップでは、建築的な面白さが評価されるが、都市的な視点ではより広い知識や経験を要することがあります。学生たちは建築的な面白さは表現できますが、都市の文脈を捉えていくことはまだ難しいかもしれない。学生たちがアイデアをカタチにすることで街の人の気持ちや様々な選択肢を考えてもらえることは効果があると思います。

都市計画的な視点では、まちの形成や変化の手順を十分考えておくことが重要です。まちへの働きかけ・手順が異なると、出てくるものが違ってくることに気を付けたい。

「市が進めている計画についてはどうお考えですか。」

GCS構想で「運命の10年」という表現で10年を目標としています。今から10年先のことをゴールとして考えるということよりも、30年先の考えたうえで10年という考え方が計画論としては大事です。現在の都市計画の法制度では、将来目標が一つしかない書き方ですが、事業などを進めてまちが変化していく手順を考えると複数の目標がありえるのではないのでしょうか。そのためにもまちの変わっていく様子を持続的に見て、また自らも働きかけていく主体が大事です。

「今後、大宮駅東口地域で必要とされるまちづくりの方向性は。」

さいたま新都心・氷川神社・大宮駅のトライアングルゾーンは一体的な都市運営の視点をしていく必要があると思います。現状では、新都心との間に旺盛なマンション建設による分断が起こりそうだと危惧します。将来的には、このゾーン内での円滑な交通移動手段を用意することも重要でしょう。是非、欧米の先進的な都市内移動手段の充実ぶりを参考にしてほしい。

大宮駅直近の区域はもともと大きな商業ポテンシャルがあるのだから、その外側のもう一回りした後背地のあり方から考え、都市づくりを進めることも良いと思います。

東口地域において、氷川神社及び参道は大切にしたい。これまでわが国では行政計画では宗教に関わるものがタブー視されてきたが、まちのなかでは信仰の場は浄化や聖と俗の行事、オープンスペースとして大切な要素であり、どう活かしていくのか大宮の課題だろうと思います。



大宮区役所前の氷川参道西通線（南側）が間もなく完成する。この沿道には高層マンションが立ち並びつつあり、新たな景観をつくっている。